

持続可能社会の実現に向けた「予測」の重要性



東北大学大学院 工学研究科
電気エネルギーシステム専攻

教授 津田 理

Makoto Tsuda

東北地方太平洋沖地震での津波、西日本豪雨と、人間は、自然の力の前では無力である。このため、自然の猛威を軽んじてはいけないことは、誰しもがわかっていることであるが、今回の西日本豪雨では、避難指示が出ているにもかかわらず、正常性バイアスが働き、対応が遅れた人が少なくなかった。日常生活では、色々な場面で予期せぬことが起きるものであるが、そのような時でも迷うことなく即座に行動に移せるようになるには、日頃から「予測」をしておく必要がある。なお、ここで言う「予測」とは、単に「事前に予想すること」ではなく、「事前に予想して、即座に行動に移せるように備えること」を意味している。団地内で車を運転しているときに子供が飛び出してくることがあるが、これを「予測」できていないと、対応が遅れて事故になりやすい。でも、「次の瞬間、子供が飛び出してくるかもしれない」と「予測」できていれば、自ずとスピードが落ち、事故を回避することができる。

しかし、この「予測」は、目先のことよりも先々のことに対して行うことに意味がある。1990年代、米国では、大型マーケットの建設による地元商店街の崩壊が問題となっていた。大型マーケットが建設されれば便利にはなるが、地元商店街は閉店に追込まれ、その後の景気変動等により大型マーケットが閉店すると、近所で買い物ができなくなるためである。このように、多くの人々に影響を及ぼす問題ほど、目先の損得にとらわれず、より長期的な視点に基づいて「予測」することが重要になる。

日本のエネルギー自給率は、2015年時点で7%程度である。この数字の深刻さを、どれくらいの人々が認識できているであろうか？ 将来、化石燃料が枯渇したとき、どこからエネルギーを得ることになるのか、どのような生活になるのか、を今から「予測」しておく必要がある。日本は島国であるため、海外からのエネルギー調達には、電気や水素のような二次エネルギーの活用が不可欠であるが、今後は、太陽エネルギーが、電力や水素の主なエネルギー源になり、太陽エネルギーを用いた水素生成では、「水電解技術」が鍵を握ると考えられる。水素が二次エネルギーの主力となるまでには、まだまだ時間を要するが、基盤技術の確立には多くの時間を要するため、目先の損得にとらわれず、次世代の持続可能社会実現のために、今から「予測」をしておくことが重要である。この「予測」を行うための「勇気」と「決断力」と「行動力」が、今、まさに、求められている。